

# 森林ボランティアにおける共同性

栗本 修滋

KURIMOTO Shuji

## 1 始めに

### (1) 問題の所在と本稿の目的

2003年の11月、亀岡市は市広報を通じて、森林ボランティアを募集した。市の担当者は定員20名を確保できるかと心配したが、締切日には27名の応募があり、全ての人をボランティアとして受け入れることにした。

地球環境への国際的な関心が高まり、1992年にはブラジルのリオ・デ・ジャネイロで「環境と開発に関する国連会議」、いわゆる地球サミットが開催された。この会議で「環境と開発に関するリオ宣言」や「アジェンダ21」とともに、「森林原則声明」<sup>1)</sup>が採択された。森林原則声明は森林に関する最初の世界的合意を反映したものであり、その声明では、森林資源及び林地は、現在及び将来の世代の人々の社会的、経済的、生態学的、文化的、精神的な必要を満たすために持続的に経営すべきであると謳われている（国連事務局1993）。これ以降わが国では、多くの自治体が森林ボランティアの組織化に取組み始めた。

アメリカやイギリスにおける最初の環境運動は19世紀末から20世紀初頭にかけて誕生した自然保護運動であり、1971年に誕生した「グリーンピース、虹の戦士」も自然保護運動の流れを受けている（寺田2000：45-47）。わが国でも1970年代から自然保護運動が活発に展開され、森林利用の一形態である林業ですら、自然破壊であると批判された。森林原則声明の採択に至る経過で、途上国は森林に関する国家主権と開発利用権を主張

したのに対して、欧米先進国は地球環境の保全の観点から、途上国を含む全ての森林の保全を主張した。最終的には森林に関する国家主権と開発利用権が認められるとともに、全ての国、特に先進国による緑化努力の必要性が合意された（国際林業協力研究会1996：33）。森林原則声明は森林の利用と自然保護の国際的合意である。わが国でも人の手が加わった里山が評価されるようになり、スギ・ヒノキ人工林に対してさえ関心が向きだした。

90年代からは全国各地で多くの森林ボランティア集団が形成され<sup>2)</sup>、森林ボランティアが持続可能な森林経営の担い手の一つと考えられつつあるのは紛れもない事実である<sup>3)</sup>。国産材の自給率が20%以下になり、林業者だけによる森林保全が困難な現状では、森林ボランティア活動が期待されている。森林ボランティア活動に参加している人は森林保全のためにボランティア活動している意識よりも、都会の喧騒から離れてのレクリエーション気分のほうが強い。かつては山村に住む人々の生業によって予定調和的に森林が保全されていた幸福な時期があったのに対し、今日では市民の活動・保全運動と森林保全の幸福な一致が見られる（柿澤2001：92）。

ところが、森林ボランティア活動の現場では混乱と論争が生じている。森林の姿は地域社会との関係、歴史的経緯、森林を支える自然環境などによって多様であるから、森林ボランティア活動の現場では、どのような森林を保全の対象とするのか迷うのである。また、森林ボランティア活動を

担う人々は活動に比べて目の前に展開している森林の広大さに自分たちの非力さを痛感する。ボランティア活動を傍観している人から、そんなことをして役に立つのかと非難の言葉を受けることさえある。緒についたばかりの森林ボランティア活動を持続させるのに最も困難なことは、森林ボランティア活動の意義をボランティア活動に参加している人も、参加していない人々にも見出しにくい点にある。行政は森林ボランティアを組織化し、地域の森林保全を担ってもらつつもりであったが、ボランティア活動を支援する過程で、林業の専門者と森林ボランティアの力量の差異が明らかとなり、行政効果を問われることを心配し始めている<sup>4)</sup>。

しかし、森林ボランティアの呼びかけに応じて多くの人が参集する現実を踏まえるなら、森林保全に役立つかどうかといった道具的機能だけで評価するのではなく、都市社会に森林ボランティア集団が存在することの意味を考察する必要がある。鯉坂は都市移住者の就業構造を考察する中で、「きびしい職場での労働生活や都市生活に対して、職場での人間関係、居住している都市の行政施策、また近隣や家族・親族の集団やネットワークによって、地方から都市への移住者はなんとか職場および地域生活を維持してきたと思われる。」と述べている(鯉坂 1994: 84-85)。森林ボランティア集団も都市で生活する人たちが、自己を取り戻したり、充足させたりするために活動している集団であると考えられる。それ故に都市社会に森林ボランティア集団の自立的な持続が必要であり、自立的持続方策を論考することを本稿の目的とする。

「森林ボランティア」の用語は既に論文に登場している(長谷川 2003; 内山 2001; 柿澤 2001; 森 2000)。森は森林ボランティアの活動実態を踏まえ、森林ボランティアを「都市に住む人たちが

休日などを利用して森林に出かけ、森に親しむさまざまな活動をおこなうこと」と定義づけている。森に親しむ活動が結果として森林保全に寄与していることを指摘して、本稿でもこの定義を援用する。森林に人が関心を向けなくなってから、廃棄物の不法投棄が増大している現実を目の当たりにすると、筆者は人が森林に入る活動の全てが森林保全に寄与しているとしたい。

## (2) 森林ボランティア集団の共同性

地域社会には多様なボランティア集団が存在している。その集団は鯉坂が論述しているように、社会で環境問題の解決や「まちづくり」のコアとなりうる潜在力を持っており、町内会などの地域住民組織や水利組合や商工会などと大きくは同じに位置付けられ、社会の構成上「地域住民組織・集団」に分類される(鯉坂 2003: 1-6)。今田は鯉坂の「地域住民組織・集団」を中間集団とし、国家による行政管理的な公共性を打破し、市民の力による公共性に再構築するためには中間集団の再生と活性化が不可欠としている(今田 2002)<sup>5)</sup>。森林ボランティア集団も集団の成員が共同性を発揮し、市民の力による森林保全を志向しているはずである。その場合、森林ボランティア集団の共同性は森林ボランティア内部の成員間だけで形成されているのではなく、常に集団の外に開かれ、地域社会の多くの人々と集団との相互作用によって形成されている。似田貝は広島県福山市の公共政策にかかわる団体調査から、「地域社会にあって、組織外に向かって活動する社会的生活に関わる諸団体こそが、社会的領域と共同生活領域との活動を連接する、新しいボランティアリズムを形成している(似田貝 1991: 126)。」ことを明らかにした。

古い公共性によって森林や田畑がつぶされ、新たに形成された都市に人々は定住し、定住した人

が自らの意思によって森林を保全するために集い、集団を形成し、共同活動を行っている。問題解決を目指して共同活動を行うという現象だけをみれば、前近代社会における共同体と区別し難いこともあるが、重用な点は自立した主体によってあらためて共同活動が作り出されることであると蓮見は指摘している（蓮見 1991： 22）。問題を自覚した主体が集い、共同して解決に対処するのであって、任意性が高い。このことを踏まえると、森林の保全という問題解決を目指す集団内の共同性は成員に強制されたものではなく、任意性の高い共同性である。その共同性は「道具的共同」や「表出的共同」「場所の共同」などが重層的に絡み合いながら総体を形成している。森林ボランティア集団の共同性について論考することによって、森林ボランティア集団の持続的な自立方策の問いに答えるのが、本稿の目的である。論考にあたっては、共同性の重層を認めた上で、共同性を「道具的共同」「表出的共同」「場所の共同」に分ける。分けることによって、森林ボランティア活動を具体的に論考できると考えたからである。共同性を主題化した論文は、地域社会的な規定のもとで、実証的・実態的レベルで論じていることが多い（長谷川 2000： 437）ので、本稿も大阪府高槻市にある森林ボランティア集団である大阪植物観察会を事例にして体験的、実態的に論じる。

森林ボランティア集団も集団であるから、集団の目的を達成するための道具的機能を持っているし、集団の意思を表出させる表出機能を持っている。ボランティア集団が目的を達成しようとすれば、集団の成員が具体的に行動を起こし、目的達成のための作業をしなければならない。無報酬であるから、成員は集団の目的を個人の行動の原理として理解し、目的達成のために活動することを自覚しないと、作業をしない。一人ひとりの成員が集団の目的を理解した結果、成員相互に目的を

共有し、目的達成のために活動することを本稿では「道具的共同」と定義する。

成員の一人ひとりが集団の目的を理解し活動を開始しても、成員相互に親和性がなければ、その成員の目的達成志向と他会員との関係持続するための苦労を斟酌し、やがて退会することもある。目的達成意識が強ければ親和性を築くように努力することもある。このように集団における成員の感情や意識は外の世界にも関心を向けながら、成員間で相互作用している。このような相互作用とその結果を本稿では「表出的共同」と定義する。道具的共同と表出的共同は影響しあっており、表出的共同が強くなれば道具的共同も強くなる正の相関があるし、根底では繋がっており分離できないこともあり得る。

森林ボランティア活動は森林で活動する。活動を実践する場所がなければボランティア集団の存続が困難になる。森林ボランティア集団の成員は、その集団に属するかどうかの判断の一つに、活動の場所の選好がある。場所も選好した結果として、ある森林ボランティア集団の成員になっているので、成員相互には地理的空間としての「場所の共同」ができています。森林ボランティア活動はその時々活動に全員が参加しているわけではない。自らの意思によって参加した人が、結果として機会を共有し活動する。同時に地理的空間としての場所を共有し活動している。本稿では機会と地理的空間としての場所を共有し共同活動することを「場所の共同」と定義する。

## 2 事例の概況

### (1) 高槻市内の森林ボランティア集団

高槻市は大阪市と京都市の中間に位置し、2002年から、中核都市に指定されている。人口は1960年に約7.9万人であったのが、「図1. 高槻市の人口推移」のように、高度成長期に急激に増加し

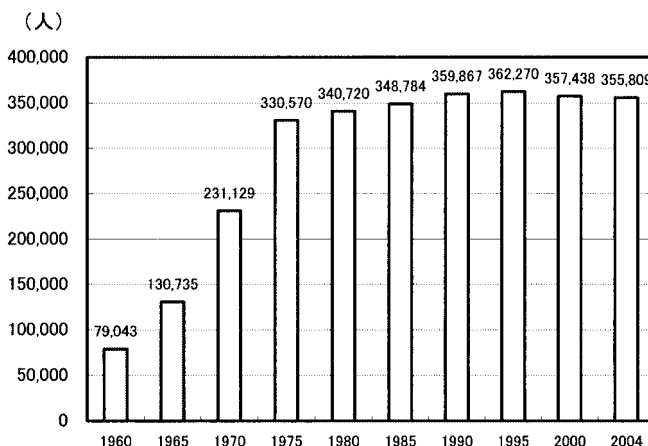


図1 高槻市の人口推移

資料：国勢調査，高槻市産業市民部市民課・総務部行財政改革推進室

1970年には23.1万人、1975年には33.1万人でこの年以降は落ち着き、現在では約35.6万人である。

1960年代の人口急増によって多くの小学校を一挙に作らなくてはならず、道路をへだてて2校が並ぶ校区も出現するなど、高槻市は全国でも有名な人口急増都市であった。1960年代の人口の急激な増加は、高槻市がかかわって大規模なニュータウン造成などをしたのではなく、高度経済期に大阪市や京都市で職についた人々が、当時としては比較的安い住宅を求めて高槻市に移動してきたことによる。高槻市に移動してきた人々も高齢化し、急ごしらえの小学校の統廃合が、現在では大きな行政課題となっている。

高槻市は大阪府下の都市の中では河内長野市について森林が多く、市域の約46%を占め約4,800haである。1970年代にゴルフ場が1ヶ所造成されたものの、バブル経済期には森林銀行制度<sup>6)</sup>を創設するなど、森林の保全を施政方針としてきた。森林の所有形態では92.7%が個人の所有地である。また、森林の現況はスギやヒノキの植林地が約51.3%であり、そのほとんどは1960年代

表1 高槻市内の森林ボランティア

ボランティア集団	分類	会員数
NPO 法人大阪植物観察会	A	141
高槻自然倶楽部	A	11
日本森林ボランティア協会 高槻部会	A	30
ネイチャーたかつき	A	44
萩谷もりあおクラブ	A	53
里山ネットワーク	B	82
たかつき環境市民会議 里山グループ	B	20
美しい摂津峡の緑を守る会	C	50
合計		431
A：自立型 B：依存・協働型 C：対抗型 会員数は推定値を含む		

資料：高槻市の情報及び筆者の聞き取り調査による。

の高度成長期以降に森林組合が植栽した林で、育生途上である。

市民の森林に対する高い関心を反映して、高槻市内には「表1. 高槻市内の森林ボランティア」のように多様な森林ボランティア集団がある。ボランティア集団は組織化の過程と、行政との関係

で、3つのグループに分けられる。自然保護を目的として行政に対抗する中で組織化され、行政とは一線を画している対抗型、森林活動を目的に自然発生的に組織化され、行政とも良好な関係を維持している自立型、行政の呼びかけに応じて組織化され協働を目指しているものの自立途上の依存・協働型である。対抗型の美しい摂津峡の緑を守る会は1980年代の後半に高槻市の風致地区である摂津峡の一部を改変して、市がスポーツ公園を作ることに自然保護の立場から反対することを目的として設立された。市民の反発を受けて、市はスポーツ公園計画の一部を森林公園に変更し、総合公園として整備した。美しい摂津峡の緑を守る会は総合公園が完成した後も、公園の使われ方の看視や摂津峡のゴミ掃除などを続けている。会員数などは公表していないが定例のゴミ掃除には10名から20名程度が参集する。自立型の中で大きいのはNPO法人大阪植物観察会である。NPO法人大阪植物観察会（以下大阪植物観察会と記す）については次節で詳述する。依存・協働型の里山ネットワークは高槻市森林整備室が2001年に里山の保全活動と呼びかけたことに応じて集まった人たちの集団である。活動の場所や活動内容についても市が関与している。高槻市に居住するか市内で働く人で構成され、82名が登録されている。たかつき環境市民会議里山グループは「たかつき環境市民会議」の会員の中で、里山活動に関心を持っている人々の集団である。たかつき環境市民会議の会員は、2002年9月に高槻市環境政策室が市民環境行動計画の作成者を募集し、それに従って参集した人々である。募集目的の市民環境行動計画を検討する過程において、環境市民会議では行動計画より先に環境活動を創出する必要があると判断し、環境活動グループを創出した。里山グループは里山に関心を持って活動を始めた、たかつき環境市民会議内の一つの集団であ

る<sup>7)</sup>。たかつき環境市民会議の事務局などは市の環境政策室においている。

本稿で考察する共同性は集団内部の人と人の関係、集団内の人と集団の外の人との関係から成立つと仮定している。また、研究の目的は森林ボランティアの自立性の維持であるから、自立している集団であり、多様な他者と相互関係を維持している集団を研究の対象とする。その両者の条件を満たすNPO法人大阪植物観察会を研究対象に抽出した。なお、共同性の論考に他団体の活動や他団体の構成員の言動を加える必要がある場合は、それを加えた。

## (2) NPO 法人大阪植物観察会

大阪植物観察会は1999年に植物ガイド本の出版を目的に集まった数人の集団である。大阪府の北部森林地域の草花や樹木の案内本を作るため、現地を調査し写真を撮り、花をスケッチしていた。同じ仲間だけで作るより、ガイド本の作成過程から市民に参加を呼びかけようとなって、高槻市の広報紙や地域ミニコミ紙に植物観察開催日の掲載を依頼し、植物観察を実施してきた。2001年4月に植物ガイド本が完成し出版することになって、著作権の所在を明らかにする必要から、同年5月にNPO法人の認証を受けた。

法人登録後は定例の植物観察会のほか、ガイド本の販売、森林調査、神峰山野草らん園の管理等を行っている。神峰山野草らん園は高槻市大字原にある神峰山寺が所有する山の一部に、大阪府や高槻市がエビネなどの野草を植え、山野草が観賞できる園地として整備している施設である。大阪府立自然公園の一部として周辺の自然公園とともに、大阪府と高槻市と神峰山寺が運営協議会を作って運営していた。2002年の秋から高齢者の要望に応じて、車椅子で園地を廻れるように園路を改修することにし、2005年3月まで休園してい

る。休園中の2002年の冬、エビネが鹿の食害にあって掘り起こされ壊滅状態になった。1 ha 近いエビネ植栽地のエビネを急いで植え直さないと、エビネが完全に死滅するので、協議会は大阪植物観察会に植え直しの応援を要請した。その実績から、協議会と信頼関係が構築されて大阪植物観察会は協議会から休園期間中の園地の管理を委託されている。

大阪植物観察会は筆者の事務所に事務局を置いている。事務局には有給の専任スタッフが一人常勤している。筆者は大阪植物観察会の常務理事として事務所で兼務している。ちなみに、筆者の事務所は森林・林業関係の技術コンサルティングを業務としている。大阪植物観察会の代表である理事長は、八尾市に在住し非常勤である。元大阪府職員で植物に詳しく、大阪植物観察会の他、多くの団体の植物観察を指導している。他に理事1名、監事1名、幹事8名が役員である。幹事は理事会で決め、総会で承認を得た役員で法人登記上の役員ではない。会員は正会員が141名で、居住地は高槻市内在住が52%で、茨木市が20%、大阪市内、吹田市内がそれぞれ4%、その他が20%となっている。その他には神戸市内や京都市内の人も含まれる。会員の年齢に関する資料はないが、見た目には50歳代と60歳代が多い。男女比では女性が約65%と女性が多い。

経営内容は「表2. 収支内訳」のとおりである。収入は会費収入、ガイド本の売上や野草らん園管理受託などの事業収入、その他である。支出の大半は専任スタッフの給料関係の管理費である。役員は全て無報酬である。事業費は通信会員や会員への植物観察会の連絡に要する郵送費などである。家賃は支払っていない。筆者の事務所のビル所有者の好意によって、大阪植物会の事務局が同居することを了解してもらい、法人登記している。

表2 収支内訳 (単位:円)

科 目	金 額
I. 収入	
1. 入会金・会費収入	414,000
2. 事業収入	2,648,468
3. 雑収入その他	4,680
収入合計	3,067,148
II. 支出	
1. 事業費	701,965
2. 管理費	2,721,559
3. その他	4,890
支出合計	3,428,414
収支差額	-361,266

※2002年度分の収支

筆者の事務所に勤務する職員も電話の応対や来訪する会員と親しくなっていて、いつのまにかスタッフのような作業をしている。事務所の経営者である筆者の立場からすれば、事務所の作業効性を斟酌する必要があるかもしれない。しかし、零細な事務所にとって、外部からの刺激は職員に仕事の張りを持たせるとともに、時々訪れてくれる会員は外部の目として応対や立居振舞いを洗練させるので、筆者の事務所に植物観察会の事務所があることを、事務所経営者としての筆者は評価している。本稿の考察は植物観察会の理事としての立場からの考察であるから、できるだけ自省し自分自身も客体化して論述する。

### 3 共同性の発揮

#### (1) 道具的共同

神峰山野草らん園は野草好きの人には有名で、遠く広島県などからも来訪者があった。植物観察会が管理を始めて2年になる。年間の延べ人数で約700人が雑草引きや水遣り、肥料やりなどの作業に従事している。月の内、15日前後は1日につき3名が野草の水遣りや肥料やりなどの地道な作業をし、月1回は20~30名が一斉作業をする。一斉作業日には、少人数で作業すると気が減

入るような、園内への土の搬入、園内に侵入する竹の駆除などの大掛かりな仕事をする。

内山は「森林ボランティア活動を行っている人達は、自分の行為をボランティアと思っているのではなく、森林所有者と同じ基盤の上にたつ仕事と考えたほうが気持ちに正直である（内山 2001：76-78）」と論じている。専業でない森林の所有者が時々山で仕事をして、収入を得るのは数十年先であり、森林所有者は収入を得る目的で仕事をしているのでない。ボランティア活動をする人も収入を得るためではなく、作業の内容も森林所有者の仕事と同じである。森林所有者も森林ボランティアも森をつくることを楽しみとして、山で時々仕事をするのである。森林ボランティア活動を行っている人は、自己の活動が森林の保全に本当に役立っているのか、その有効性を実感することは必ずしも容易ではない（長谷川 2000：186-187）。森林の保全には決められたやりかたがあるのではなく、森林の文化的自然的歴史によってそれぞれの森林で保全のしかたを判断すると、ますます自分たちの活動の有効性が不安になる。

神峰山野草らん園の管理のように、活動の目的が具体的に提示されると、集団として共同性を発揮しやすい。2002年3月の大阪植物観察会幹事会は管理を受託することの是非を検討した。「会の収入になるのはありがたいが、収入を会員に分配すると、どのような分配の仕方でも会員間に不平不満が出るに違いないから、分配をしてはいけない。」と全ての幹事が発言した。多くの会員に作業をしてもらって、その結果として、大阪植物観察会が収入を得るのだから、作業をもらった人にはなんらかの還元をすべきではないかと、事務局は再度幹事会に相談した。幹事会はそれでも、有償的な作業とすべきでないと結論を出した。無償であること、交通費のみ支給することを

条件に会員の中で作業してくれるボランティアスタッフを募ることにし、重要な案件であるから、総会で諮ることにした。ボランティアスタッフだけで神峰山野草らん園を管理すると、ボランティアスタッフとボランティアスタッフでない会員との間に意思疎通が図れなくなるので、日常的な作業はボランティアスタッフが担当し、一斉作業は全員に呼びかけることにした。ボランティアスタッフに24名の会員が応じた。7月、8月の水遣りを除くとボランティアスタッフの一人が月に1回程度の作業で野草らん園は管理できることになった。

「ここにきて作業していると、花が咲いているでしょう。もう嬉しくて、今度はどんな花が咲いているかすごく楽しみよ。世話したエビネがどうかと気になってね、次の作業の日が待ち遠しいのよ。」などと会員は作業を楽しんでいる。筆者は雨の日に作業してもらうのは気の毒だから、事務局専任スタッフのSさんに雨の日の作業の中止を相談すると、現場の声をいつも聞いているSさんは作業を楽しみに来ている人がいるので、中止にできないと判断していた。通常作業の日は3名程度の人数だから、多くの人が参集する一斉作業を楽しみにしている人も多い。「私らこのお菓子を楽しみに作業しているみたいなものよ。」と、作業の合間の休憩に話が盛り上がる。

内山が論じているとおり、ボランティアの人々は収入を目的に作業をしているのではないことは明らかである。しかし、交通費を支払う時は、やはり嬉しいと素直に表現しているし、作業の合間の茶菓子などを考慮すると、ボランティア活動と言え、快適に作業してもらうには、経費が必要である。作業日を調整したり、一人ひとりのボランティア作業を全体の管理に仕上げるには、専任スタッフのSさんの役割が大きい。月に一回、野草らん園にやって来たボランティアスタッフは、

「今日は何をするの。」と、まず S さんに作業の内容を聞く。森林ボランティア集団の成員にとって、野草らん園の管理などと集団の目的が予め決められておれば、集団の目的をそれぞれの成員が理解し、その目的を自己の楽しみへと自己目的化できる人達によって、道具的共同を發揮する。しかし、個々の人達が自己の楽しみへと自己目的化し、その達成のためにばらばらの行動をしたのでは、道具的共同にはならない。事務局専任スタッフのように道具的共同へ導く機能を持った人の存在が欠かせない。森林ボランティア集団が自立的に活動するためには、経費と人材が必要であることを痛感する。

高槻里山ネットのように、集団内に道具的共同へ導く機能を持った人がいなくて、市の職員がその機能を發揮しているのであれば、集団としての活動目的を持っていても、道具的共同は市の施策の中に組み込まれやすい。また、森林保全に役立つ何かをしようとして、人々が集団を先に形成した場合は、集団としての活動目的を設定しなければ集団は共同で活動しにくい。たかつき市民環境会議里山グループが1年以上も活動目的、目標を模索していることから、森林ボランティア集団が自主的に具体的な活動目的を設定するには時間がかかることがわかる。森林の保全には決められたやりかたがない事実を踏まえると、時間がかかっても目的や目標設定の市民的合意形成過程を大切に、市民的合意によって行政から自立する必要があると、里山グループは判断している。そのような努力をしないと、市役所の募集に応じて集まった集団であるから、市役所に集団の目的を提示さ、市民の主体性が發揮できなくなる。

森林ボランティアの道具的共同の形成には、集団としての具体的な共同の目的設定を前提として、その目的を達成するため、個々の人たちが集団の目的を自己の目的へと転換することが必要で

ある。その上で、個々人の活動を集団の目的達成へと誘導する集団内部の事務局スタッフによって道具的共同が發揮される。それには、集団内に資金と人材が欠かせない。

## (2) 表出的共同

植物観察会の植物観察は月4回から2回開催される。植物観察の集合場所や時刻が知らされるのは、会員と通信会員に対してである。もっとも、NPO 法人大阪植物観察会のホームページを見れば、だれでも植物観察の場所と日時を知り、参加もできる。いつの植物観察でも会員以外の人がいる。植物観察は大阪北部の山道で行われることが多く、専任スタッフの S さんと幹事の人達は予め下見をし、トイレの場所、到達するための交通手段などを調べる。当日は植物に詳しい会長が植物解説し、参加者が多くと筆者や植物観察会事務局長の I さんが分担する。

「私はこの植物で植物に目覚めた。葉の上に花が載っていて、こんなことがあるのかと思った。植物を知らなかったそれまでの人生が悔しい。」などと参加者は植物に対する思いを語る。団子に使う葉を見つけて、母親と一緒に葉を摘んだこと、団子を作ったことなどの思い出を語る人もいる。植物の解説者から植物の名前を教えてもらうことによって、今までなんとなく身体に受け入れて植物を、形あるものとして蘇らせている。その植物の思い出を人に語ることによって、自分の意識を呼び覚まし、語りを受け入れた人と親しくなる。「そうそう私らもそれで、団子を包んだよ。私らの地方では、みんなそれだった。かしわ餅ゆうた。でもかしわ餅ゆうたら、カシワの葉でしょう。私もおかしい思うてたんよ。」などと、周辺の人を生まれ故郷の話へと引き込んでいく。植物観察会の前半は、解説者による話を聞いているが、後半に入ると、それぞれの人が話を始めて、



興味のある語りに輪ができる。筆者も植物の解説をしながら、そんな楽しい話に聞き耳を立てている。

大阪植物観察会の会員は植物が好きでそれを縁として集まった人達である。好きのありようは人によってさまざま、野草が好きな人、自然の木が好きな人、植物のある風景が好きな人などである。共通しているのは生き物としての植物や自然が好であることだ。生き物としての自然とは、自然科学者が分析的に論述する生態系としての理論上の自然ではなく、その場に自分が立った時、野鳥の声を聞き、美しい野草に感動し、自分も自然も生きてると自分の身体に受け入れることができる生活者の自然である。生きている自然と自分の身体は命を共振している。自分だけでなく、植物好きな仲間と語り、活動することによって共振の振幅は大きくなり、感動が増すことを会員たちは経験として知っている。植物を見て故郷の生活を思い出してそれを語る時、単にノスタルジアを感じるのではなく、植物が自分と生活をともにしていた存在であったことを思い出して、他の会員と共に、自然と共生していることを身体で受け入れている。これが大阪植物観察会の基層の表出的共同である。

森林ボランティア活動の表出的共同は森林ボランティア活動に参加することによって、自己の存在を他者と共に認め合うことである。植物観察をしているのは植物好きの趣味を満たしているだけの批判があるかもしれない。しかし、「親の看病に疲れたて気が減っていたので、今日はここにきてよかった。」「何もすることがなさそうだから、夫を連れてきたんよ、よろしくね。」「今日は友達を連れて来た。」と言う会員たちの声を拾っていくと、植物が好きということを媒介として、他者と向き合っていることがわかる。癌手術を受けてその後の健康回復のために植物観察会に来て

いながら、歩きにくいお年寄りのために手を引いてあげている会員の姿を、お互いさまとして会員は見ている。そして、その人の健康回復を誰もが願っている。会員も会員外の人も自然との共生を基層に持つ表出的共同によって自己を取り戻している。大阪植物観察会は誰でも、いつでも参加できる開かれた集団であるから、地域社会の生活者が生きている自然を確認する装置として、その存在自体に意味があると思っている。

道具的共同が外に向けて発揮するのに対して、表出的共同はそれぞれの人の身体に形成される。それぞれの人に形成されることを尊重するので、道具的共同のようにあえて方向付けするための事務局スタッフのような人材の必要がない。専任スタッフのSさんは植物観察の準備さえすれば当日は比較的人任せにできる。表出的共同だけを目的化している団体であれば、比較的経費も人材も少なくすむ。たかつき市民環境会議里山グループが自分たちの活動目標を設定するために、高槻市内の里山観察から始めたのは、集団に資源がほとんどない状態でも表出的共同を構築できると判断したからである。表出的共同を先に構築したほうが、集団としての共同の目標を設定しやすいことを、集団の議論の中から見出し、まず、「山を見ようやないか。」となった。

### (3) 場所の共同

森林ボランティアが活動の場所を自力で見つけるのは大変困難で、たかつき環境市民会議里山グループも活動の場所を探している。森林保全に寄与しようとしても、現実には活動の場所が少ない。行政や林業者の協力がないと活動の場所を見つけることは困難である。せつかく、高槻市の森林を保全しようと高槻市民が参集しても現実には活動する場所がない。高槻里山ネットは高槻市が森林ボランティアを募集して活動を始めたので、市の担当

者が活動の場所を用意している。亀岡市も森林ボランティアを募集した時にはすでに、市は活動の場所を確保していた。財団法人大阪トラスト協会が森林ボランティアを募集し、茨木市の車作集落の共有林で活動を始めた例では、集落の人々に森林の活動が理解されて、集落の祭りに招待されるまでになっている。財団法人大阪トラスト協会は大阪府が設立した法人で職員は大阪府の林業担当職員が出向している。たまたま、トラスト協会の職員が茨木市の林業を担当していた時に、車作集落の共有林管理者と面識があったので、森林ボランティア活動の場所として、集落の共有林を提供してもらうことができた。大阪府の信用で提供してもらえたのであって、車作集落がボランティアを要請したのではない。前身が高槻市森林組合である大阪府森林組合三島支店にも労働組合などから森林ボランティア活動をしたいので、場所を探して欲しいと要望が多く寄せられる。森林組合は大阪府行造林地<sup>8)</sup>や市有林などを提供し、ボランティア活動の後、仕上げをする。林業の場で植林や育林などを行う林業型の森林ボランティア活動は、特定の場所で恒常的に活動するのではなく、森林組合の事情や林業者の事情で時々場所が移動することがほとんどである。

大阪植物観察会は活動を植物観察から始めたので、活動の場所を特定する必要がなかった。どの山道で植物観察をするのか、スタッフと幹事が相談して決める。事務局が高槻市内にあって5割の会員が高槻市内に住んでいるので、どうしても、高槻市内の山道が選ばれることが多くなる。高槻市内の山道が事務局のスタッフや幹事の人々は他の市町の在住の会員に気兼ねする。気兼ねするのは高槻市内の山道が高槻市内の人に便利がよいだけでなく、高槻市内の山は高槻市内の人の領域に属すると思っているからである。大阪市内の会員にとっては、茨木市の山でも高槻市の山でも大差

ない。けれども、高槻市内に住んでいる会員は大阪市の会員に来てもらったと思うのである。高槻市に住んでいる会員が特別その山と関係があるわけではないのに、植物観察に山に行って他の地域にすんでいる会員と接すると、市内の自分たちの領域の山と思う。単に山をなんとなく眺めているだけでは、自分たちの領域の山とそれほど意識しないのに、市外の人と共同して活動したら領域意識が働く。大阪植物観察会が能勢町へ行ったら、能勢町に居住する会員は能勢に来てくれて嬉しいと素直に喜ぶ。茨木市の会員達は自分たちの縄張りだから、ここを見て欲しいと案内してくれる。人が他の人と共同して活動をすると、同じ場所で共同活動をした事実に基づいて共同の意識を持つ。あそこのマンサクは綺麗だったね、などと後々まで話題にし、他者との共同が持続する。同時に、同じ自治体に住んでいる人の間にはわれわれの山との意識が生じる。一緒に植物観察をした「山」に対して参加した人々の間に共同意識が形成されるのと同時に、同じ地域にすむ人々にはそれに加えて領域意識も形成される。会員はそのことを自覚し「われわれの住んでいるところの山」として他の人を排除するのではなく、「われわれの山」のよさを観て欲しいと努力し、評価されると嬉しいと喜ぶ。

神峰山野草らん園のボランティア作業でも始めは、われわれの住んでいるところの山へわざわざ来てもらってと、高槻市に在住している会員には領域意識があった。しかし、作業を継続する過程で、領域意識は薄れ、作業仲間としての「場所の共同」意識へと転換した。われわれが管理している園と表現するようになった。場所の共同意識は作業スタッフ仲間で形成されている。この共同意識は表出的共同を強くし、仲間と作業することが楽しみとなり、道具的共同もよりよく発揮される。しかし、思わぬところで災いした。一昨年末

に作業の一区切りにと、仲間内で忘年会を開いた。「楽しかったね。」の会話が、作業に参画していない会員にたまたま伝わるところとなった。いつも一緒に楽しく植物観察をしているのに、どうしてわれわれは忘年会に呼ばれなかったのかと、不満が出た。仲間の間では問題がない行動と思っても、作業に参加していない人と参加している人では仲間意識に差異が出てしまっていた。大いに反省するところとなり、それ以降はすべての人に通知して会をすすめることを確認している。

人は場所を身体で捉える時、場所と自分との関係を自分の経験から導く。居住の経験から同じ市内にある山と自分の関係を理屈抜きで身体に受け入れる。その山を所有していなくても、同じ市内に住んでいる人の間では、われわれが住んでいるところの山と思う。その領域意識は植物観察活動を他の自治体に居住する人と共同することによってさらに強くなる。ところが、同じ場所で仲間とボランティア活動を繰り返すことによって、活動の経験が身体に蓄積されると、場所の共同の関係を強くし、同時にボランティア仲間との表出的共同の関係も強くする。領域意識を薄め、ともに同じ場所に働きかけた人同士としての関係が構築される。

同じ場所で活動することによって、場所と人、人と人との関係を強くすることを経験的に自覚している林業や農業の所有者は、自分の山で継続的に特定の個人や集団が活動することを望まない。土地は基本的にその土地に働きかけてきた者に権利がある(鳥越 1997: 47-64)ことを、集落の歴史をとおして体験している森林所有者は所有権が侵される危険を察知するから、一時的なボランティア活動に場所を提供しても、継続的には活動の場所を提供したがる。植林や間伐などの林業型森林ボランティア活動は比較的理解され各地で受け入れられている。それは、活動の場所が移動

するからである。神峰山らん園の管理のように特定の場所で活動する場合は土地所有者に信頼されている機関や人の仲立ちが必要である。大阪植物観察会は協議会から委託されて神峰山野草らん園を管理しているが、その土地の所有者である神峰山寺は大阪植物観察会が管理しているのであって、ボランティア活動の場所を提供したのではないとの立場をとっている。このように森林所有者はボランティアが同じ場所で継続的に活動することを好まない。けれども、同じ場所での森林ボランティア活動の継続による場所の共同の構築はボランティア集団の成員間の親和性を増加させ、ボランティア集団の表出的共同及び道具的共同を強くする。

#### 4 結 語

高槻市が2000年11月に実施した環境に関する市民意識調査によれば、「図2. 山林保全への維持活動への参加」のとおり、森林保全のために森林ボランティアに参加・協力すると応えた人が25.5%いた。高槻市内のボランティア団体は先に記したように、8団体で会員数は多めに見積もって450人程度である。参加しようとする意識と実際に行動するのは異なるとしても、現在、森林

問. 山林の保全のためにあなたはどのように関わっていきたいですか。

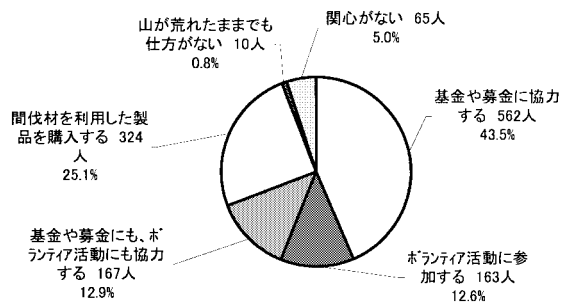


図2 森林保全への維持活動への参加

資料：高槻市環境政策課

ボランティア活動している人が市民全体の0.2%以下では少な過ぎる。市民が森林ボランティアに参加しにくい原因は次のとおりと考えられる。市民の多様な思いを受け入れことができるほど多くの個性的な森林ボランティア集団が生成されていない。森林ボランティア活動の場所が少なく、市民は森林ボランティア活動を具体的に構想しにくい。ボランティア集団には、レスター・サラモンがボランティアの失敗<sup>9)</sup>で指摘しているように、必要な資源が不足している (M. Salamon 1995: 44-48) ので、市民が期待しているほど目に見えた形で森林保全の成果を現すことができない。また、森林ボランティア活動の参加者は森林保全のために道具的共同だけを發揮しているのではなく、道具的共同の過程で表出的共同を重視するようになり、市民からすると閉じられた趣味の活動と見られてしまうことがある。

全国的に見ると、バブル経済が終焉し財政逼迫と期を一にして森林ボランティア集団が数多く生成している。市民の善意によって森林保全を図ろうとしている行政の意図が透けて見える。「森林保全に寄与するために森林ボランティアに参加しますか。」と、高槻市の市民環境意識調査で質問しているように、行政は森林ボランティアを森林保全のために利用しようとしているだけであれば、森林ボランティア集団と行政との対等な協働は困難である。森林ボランティア集団の目的が森林保全であったとしても、自立的な集団の場合は集団の資源量と集団の共同の維持を斟酌し、資源が少ない場合であれば、表出的共同を優先することによって活動を継続させるので、行政が期待するほど森林保全には寄与しない。しかし、その表出的共同は、都市生活者が自然を身体に受け入れることによって都市生活で傷ついた自己を回復するために必要な行為であることが、大阪植物観察会の会員の活動から明らかとなった。それ故、森林ボ

ランティア集団が市民に開かれている限り、「まちづくり」のコアになる潜在力を有しているのである。行政は森林保全を目的に森林ボランティアを呼びかけてはいるが、それに応じている人は森林保全目的の達成のためにだけに参加しているのではないことを行政も市民も知る必要がある。

大阪植物観察会は会の目的を、身近な自然に親しむことによって自然を保全すると、表出的共同を重視している。また自立的な森林ボランティア集団の多くも、森林活動の楽しさを表現しながら会員を募集している<sup>10)</sup>。ボランティア集団が自立的であればあるほど、少ない資源で表出的共同を優先し、表出的共同を道具的共同へ導こうとする。その結果、サラモンが資源の不足と共にボランティアの失敗にあげた温情主義に陥りやすくなる。森林の保全の仕方は多様として、市民とともに真剣に議論することもなく、仲間内だけの合意で活動を進めると、森林保全のつもりが森林破壊と指弾されることもある。ボランティア集団が自立し持続していくためには、都市の生活者の支持による仲間の補充が不可欠であるから、ボランティア集団は自らの活動の情報を公開し共同活動の意味を都市の生活者と共有する必要がある。

森林保全のために行政が呼びかけて生成させたボランティア集団であっても、行政は集団の表出的共同を理解し、恒常的な活動の場を斡旋するなどの支援をすれば、道具的共同を強く發揮することができて森林保全に対する効果も高くなる。大阪トラスト協会では、行政と土地所有者の伝統的な信頼関係を活用することによって、森林ボランティアの場を斡旋し、そこで根付いた森林ボランティアの人々によって集団を生成させ自立を促し、また次の活動の場を斡旋することを繰り返している。集団の成員が多くなりすぎると、集団は個人の自立が前提であるから、多様な個人の目的志向を集団の目的に誘導することが困難となり、

共同性を十分に発揮することができないことを経験によって習得しているからである。高槻市の調査によると多くの市民が森林ボランティアへの参加の意思を示している。それを叶えさせるためには、市が呼びかけて生成させたボランティア集団をできるだけ早く自立させて、その集団と既に自立している集団と行政とが協働してネットワークを形成させる必要がある。そのためには大阪植物観察会の事務局の専任スタッフのような人材を確保し、その人材を森林ボランティアの共同性発揮の専門家としてボランティア集団自身が育てなければならない。なぜなら、自立した個人によって成り立っているボランティア集団の共同性のネットワークには、集団が持っている個性豊かな共同性を、それぞれの集団が相互に認め合えるように導く人材が欠かせないことを痛感しているからである。

〔注〕

- 1) 1992年6月ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された環境と開発に関する国連会議において採択された「すべての種類の森林の経営、及び持続可能な開発に関する世界的合意のための法的拘束力のない権威ある原則声明」を森林原則声明と称している。
- 2) 2003年8月の林野庁と森林ボランティア団体との意見交換資料によると、林野庁が2000年に把握しているのは581団体である。10年以下の活動暦が約80%と90年代に入って急増していることがわ

かる。

- 3) 例えば、大阪府森林組合三島支店（旧高槻市森林組合）では、2004年から森林ボランティアを市民林業士として認定し、森林組合の林業士（常雇の森林作業技能者）とともに森林作業の現場で協働してもらう予定にしている。
- 4) 高槻市では行政評価の結果を公表している。それによると市が呼びかけて組織した森林ボランティア（里山ネットワーク）について、さらなる効果は期待できないとして、大阪府森林組合などへ糾合しようとしている。
- 5) 鯉坂は家族を地域住民組織・集団に加えていないのに対し今田は家族も中間集団に加えているなど、必ずしも一致していない。
- 6) 森林銀行制度は森林所有者、市、緑化森林公社が森林保全協定を締結し、森林所有者が森林を手放さなく手はならなくなった時、公社が森林を保全してくれる買手を斡旋する制度である。山村恒年（1989、197-199）は緑を守るための自治体独自の施策として森林銀行制度を紹介している。
- 7) たかつき環境市民会議には里山グループ他にも、水グループ、環境講座グループ、エコライフグループなど10の活動グループがある。これらのグループの活動内容はホームページで見ることができる。（<http://www.takatsuki-kankyo.jp>）
- 8) 大阪府と森林所有者が分収契約し、大阪府が造林から育林まで費用負担し、実質的に大阪府が経営している森林である。
- 9) 「ボランティアの失敗」に資源の不足、排他主義的温情主義、アマチュアリズムを挙げている。
- 10) 関西環境情報ステーション pico が2003年9月に編集発行した『関西環境ボランティアガイドⅡ』には、大阪、京都、滋賀、奈良、兵庫府県の森林ボランティア団体の自己紹介が掲載されている。

〔参考文献〕

- 鯉坂 学, 1994, 「都市移住の就業構造」松本通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』, 83-101.
- 鯉坂 学, 2003, 「オーストラリアの住民組織について」『評論・社会科学』第71号, 1-24.
- 村澤宏昭, 2001, 「森林保全とその担い手」鳥越皓之編『講座環境社会学第3巻自然環境と環境文化』有斐閣, 77-103.
- 関西環境情報ステーション pico, 2003, 『関西環境ボランティアガイドⅡ』.
- 国際林業研究会, 1996, 『持続可能な森林経営に向けて』, 日本林業調査会.
- 国連事務局監修, 環境庁外務省監訳, 1993, アジェンダ21付録(社)海外環境協力センター, 454-460.
- 今田高俊, 2002, 「はじめに」佐々木毅 金泰昌編『公共哲学7 中間集団が開く公共性』i-v.
- 長谷川公一, 2003, 『環境運動と新しい公共圏』有斐閣, 60 2000「市民が環境ボランティアになる可能性」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学』, 177-192.

- 蓮見音彦, 1991, 「現代地域社会論」青井和夫監修蓮見音彦編集『地域社会学』サイエンス社, 3-43.
- Lester M. Salamon, 1995, *Partners in Public Service* The Johns Hopkins University Press.
- 森太, 2000, 「都市住民による森林ボランティア」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPO の社会学』, 92-95.
- 似田貝香門, 1991, 「現代社会の地域集団」青井和夫監修蓮見音彦編集『地域社会学』サイエンス社, 97-158.
- 寺田良一, 2000, 「たたかう環境 NPO」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPO の社会学』, 43-58.
- 内山節編著, 2001, 『森の列島に暮らす』コモンズ.